

日本リハビリテーション医学会 専門医制度卒後研修カリキュラム

[序文]

日本リハビリテーション医学会は1963年に設立され、リハビリテーション医療ならびに医学の発展と会員の臨床知識・技能の向上に寄与してきた。1980年に専門医制度が制定され、1987年から5年間の移行期間を経て1992年に認定臨床医制度と新たな専門医制度が発足した。さらに2003年に専門医制度規則が改正され、「専門医」の名称が「リハビリテーション科専門医」に変更された（学会誌40巻474頁掲載）。

一方、教育研修体制も専門医認定制度と平行して整備され、1982年にリハビリテーション医学卒後研修ガイドライン（学会誌19巻352頁掲載）が作成され、1993年に改訂された（学会誌30巻370頁掲載）。その後2003年に教育大綱が定められ（学会誌40巻473頁掲載）、それに則った卒後研修カリキュラムの改訂案作成作業が教育委員会により認定委員会との連携をとりつつ進められてきた。

この研修カリキュラムは、教育委員会で作成したもので、その内容として、リハビリテーション科専門医に相応しい知識・技能を修得することを目指し、卒後5年間のリハビリテーション医学の研修を行う際の目標として望まれる項目とレベルが示されている。しかし、臨床場面では、この研修目標に示されたこと以外にもリハビリテーション科専門医として必要とされることは多く、日進月歩のレベルを保持するためにも、リハビリテーション科専門医資格取得後も本研修目標をこえてさらに生涯研修に努めることが望まれる。

[カリキュラム修了の要件]

1. 2年間の卒後臨床研修
2. 上記1の終了後、更に学会の認定した研修施設での3年間以上の研修

[研修の到達レベルと評価基準]

総論と各論の各項目について到達すべきレベルと年次を示す。
 評価は、到達すべき年次ごとに指導責任者及び研修者自らが行う。
 到達レベル及び評価基準の指標は以下のとおりである。

到達レベル

I. 知識

- A: よく理解している
- B: 概略を理解している

II. 診断・評価

- A: 自分ひとりのできる
- B: 指導責任者のもとのできる
- C: 概略を知っている

III. 治療

- A: 自分ひとりのできる
- B: 指導責任者のもとのできる
- C: 概略を知っている

評価基準

- 3: 目標に達した
- 2: ほぼ目標に達した
- 1: さらに努力を要する

(総論)

	研修期間目標				研修期間	自己評価	指導責任者評価
	1-2年	3年	4年	5年	到達レベル		
0. 初期臨床研修	1-2年						
(1) 内科学 (神経内科, 呼吸循環器内科, 老年内科を含む)	6か月						
(2) 外科学 (整形外科, 救急医療を含む)	6か月						
(3) 小児科学 (障害児療育を含む)	1か月以上						
(4) 精神医学 (障害児療育を含む)	1か月以上						
(5) 地域医療 (リハビリテーション医療を含む)	1か月以上						
1. リハビリテーション医学総論	到達年次				到達レベル	自己評価	指導責任者評価
I. 知識	1-2年	3年	4年	5年			
(1) リハビリテーション医学概論	○				A		
(2) 機能解剖・生理学							
a. 筋骨格系 (骨, 関節, 靭帯, 骨格筋)	○				A		
b. 神経系 (中枢神経系・末梢神経系・自律神経系, 感覚器)	○				A		
c. 呼吸・循環器系	○				A		
d. 摂食嚥下	○				A		

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年	3年	4年	5年			
e. 排泄（排尿・排便）	○				A		
(3)運動学							
a. 上肢	○				A		
b. 下肢	○				A		
c. 歩行と姿勢	○				A		
d. 発達と反射	○				A		
(4)障害学							
a. 運動障害	○				A		
b. 感覚障害	○				A		
c. 高次脳機能障害	○				A		
d. 排泄障害	○				A		
e. 嚥下障害	○				A		
f. 廃用症候群	○				A		
g. 歩行障害	○				A		
h. 日常生活動作障害	○				A		
i. 参加制約（社会的不利）	○				A		
j. QOL	○				A		
II. 診断・評価							
(1)リハビリテーション診断学							
a. 画像診断							
①単純 X 線撮影（胸部/腹部/脊椎/四肢）	○				A		
単純 X 線像を読影し、基本的な異常を指摘できる							
②頭部 CT/MRI	○				A		
頭部 CT/MRI 像を読影し、脳血管障害や外傷性脳損傷、水頭症等の基本的な異常を指摘できる							
脳出血・脳梗塞及び出血性梗塞の CT 所見から発症からの時期を把握できる							
CT/MRI 所見上の障害された部位を機能解剖学的に把握できる							
③脊椎 MRI	○				A		
脊椎 MRI 像を読影し、脊髄損傷やヘルニア、脊柱管狭窄症等の基本的な異常を指摘できる							
④核医学	○				B		
脳血流シンチ像を読影し、脳血管障害や頭部外傷等の基本的な異常所見を指摘できる							
骨シンチ像を読影し、転移性骨腫瘍等の基本的な異常所見を指摘できる							
b. 電気生理学的診断							
①筋電図		○			A		
主な筋の針筋電図を行い、安静時の異常所見を指摘できる							

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年	3年	4年	5年			
主な筋の針筋電図を行い、運動単位電位の各パラメータを測定できる							
針筋電図でニューロパチー運動単位電位とミオパチー運動単位電位を判別できる							
②神経伝導検査		○			A		
主な神経の CMAP, SNAP を導出し、潜時・振幅及び伝導速度を測定できる							
H波, F波を導出し各パラメータを測定できる							
反復刺激検査を行うことができる							
③脳波	○				B		
脳波検査の結果を解釈できる							
④体性感覚誘発電位		○	○	○	B		
体性感覚誘発電位(SEP)を実施できる							
⑤心電図	○				A		
心電図検査を行い、虚血性変化、不整脈等異常所見を指摘できる							
c. 病理診断							
①筋		○	○	○	B		
簡単な筋組織の病理所見が読める							
②神経		○	○	○	B		
簡単な神経組織の病理所見が読める							
d. その他							
①骨密度		○	○	○	A		
骨密度検査の結果を解釈できる							
(2)リハビリテーション評価							
a. 意識障害の評価	○				A		
Japan Coma Scale (JCS) による意識障害の評価が行える							
Glasgow Coma Scale (GCS) による意識障害の評価が行える							
b. 運動障害の評価							
①関節可動域	○				A		
四肢・体幹の関節可動域を測定できる							
②筋力	○				A		
四肢・体幹の筋力を MMT で測定できる							
③麻痺	○				A		
運動麻痺の有無と程度を評価できる							
④失調	○				A		
失調の有無と程度を評価できる							

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年	3年	4年	5年			
⑤痙縮と固縮	○				A		
Ashworth Scale (Modified Ashworth Scale) による痙縮の評価が実施できる							
⑥不随意運動	○				A		
不随意運動の種類を評価できる							
c. 感覚障害 (疼痛を含む) の評価	○				A		
表在感覚・深部感覚・二点識別覚を評価できる							
d. 言語機能の評価							
①失語症		○			A		
SLTA に基づき評価ができる							
失語症と認知症の鑑別ができる							
②構音障害		○			A		
会話明瞭度で分類できる							
e. 認知症・高次脳機能の評価							
①知的機能障害, 認知症		○			A		
認知症を診断できる (DSM IV に基づいて)							
HDS-R, MMS を実施できる							
WAIS-R の解釈ができる							
②記憶障害		○			A		
健忘を診断できる (DSM IV に基づいて)							
③失行			○		A		
失行のタイプを診断できる							
④失認			○		A		
失認のタイプを診断できる							
⑤注意障害			○		A		
注意障害の診断ができる							
PASAT, TMT を実施できる							
⑥遂行機能障害			○		A		
WCST を実施できる							
f. 心肺機能の評価							
①一般肺機能検査	○				A		
一般肺機能検査で基本的な異常を評価できる							
②運動負荷試験		○			A		
運動負荷試験を施行できる							
運動負荷試験の禁忌と中止基準を理解している							
リスク管理と緊急時の対応ができる							
g. 摂食・嚥下の評価							
①スクリーニングテスト	○				A		
水飲みテスト・反復唾液嚥下テストの実施と解釈ができる							
②嚥下造影		○			B		
嚥下造影を施行し, 読影・結果の解釈ができる							

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年	3年	4年	5年			
③嚙下内視鏡			○		B		
嚙下内視鏡を施行し結果の解釈ができる							
h. 排尿の評価							
①排尿の理学的所見	○				A		
②排尿の画像診断		○			A		
経静脈性腎盂撮影法(IP)の結果を解釈できる							
逆行性膀胱造影(CG)の結果を解釈できる							
逆行性尿道撮影法(UG)の結果を解釈できる							
③尿流動態検査			○		A		
尿流測定(ウロフロメトリー)の結果を解釈できる							
膀胱内圧測定(シストメトリー)を施行し、レポートが書ける							
i. 成長・発達の評価		○	○	○	A		
STNR, ATNR, 一連の立ち直り反応, パラシュート反応, Landau 反射, 平衡反応等が評価できる							
反射, 反応から大まかな運動発達のプロフィールがわかる							
4・7・12・18のkey monthの所見を評価できる							
評価尺度を用いて発達を評価できる							
j. 障害者心理の評価			○		A		
①障害受容							
障害の受容過程に沿って, 患者の心理状態を把握できる							
②患者の心理状態に合わせた接し方やチームへの指示ができる							
k. 歩行の評価		○			A		
異常歩行を診断できる							
異常歩行を評価し原因を推定できる							
l. ADLの評価	○				A		
FIMによる評価ができる							
Barthel indexによる評価ができる							
m. IADLの評価	○				A		
IADLの項目を挙げ, その評価ができる							
n. 参加制約(社会的不利)の評価	○				A		
参加制約(社会的不利)の客観的評価ができる							
III. 治療							
a. 全身状態の管理と障害評価に基づく治療計画							

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年	3年	4年	5年			
①健康状態管理	○				A		
患者の健康状態を管理できる							
②高血圧・糖尿病・高脂血症などの併存疾患の管理	○				A		
高血圧・糖尿病・高脂血症などの併存疾患の管理ができる							
③急変（ショック）時の対応（BLS）	○				A		
患者急変（ショック）時に適切に対応できる（BLS）							
④廃用症候群の予防	○				A		
廃用症候群を予防できる							
⑤栄養管理（胃瘻，腸瘻など）	○				A		
胃瘻，腸瘻などによる適切な栄養管理ができる							
b. 障害評価に基づく治療計画							
①予後予測			○		A		
障害評価に基づき予後予測ができる							
②治療期間とゴール設定			○		A		
障害評価に基づき適切な治療期間とゴール設定ができる							
c. 理学療法							
①運動療法		○			A		
主な関節の関節可動域訓練ができる							
障害評価に基づいた筋力増強・持久力訓練が処方できる（等張性・等尺性・等運動性）							
障害評価に基づいた筋再教育・治療体操ならびに持久力訓練が処方できる							
障害評価に基づいて歩行訓練が処方できる							
呼吸理学療法の指導・処方ができる							
②物理療法		○			A		
温熱療法（ホットパック，極超短波，超音波，レーザー等）の適応・特徴を把握し，適切に処方できる							
低周波治療が適切に処方できる							
水治療が適切に処方できる							
頸部と腰部の牽引ができる							
③バイオフィードバック療法			○		B		
バイオフィードバック治療による運動学習を実施できる							
d. 作業療法							
①機能的作業療法		○			A		
上肢関節の関節可動域訓練を実施・処方できる							
上肢の筋力強化訓練を実施・処方できる（等張性・等尺性）							

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年	3年	4年	5年			
障害評価に基づいた筋再教育・治療体操ならびに持久力訓練を処方できる							
②高次脳機能障害に対する作業療法			○		A		
高次脳機能の障害評価に基づいて作業療法を処方できる							
高次脳機能障害を有する患者・家族に生活・介護指導ができる							
③ADL, IADL 訓練	○				A		
ADL の指導を患者・家族に行える							
買い物などの IADL の指導を患者・家族に行える							
④家屋改造							
家屋改造の指導ができる			○		A		
e. 言語療法							
①失語症		○			A		
言語療法を処方し、患者・家族に指導できる							
②構音障害		○			A		
言語療法を処方し、患者・家族に指導できる							
f. 義肢		○	○	○	A		
義手の処方と適合判定ができる							
義足の処方と適合判定ができる							
g. 装具・杖・車椅子など		○			A		
上肢装具の処方と適合判定ができる							
下肢装具の処方と適合判定ができる							
体幹装具の処方と適合判定ができる							
杖や歩行補助具の処方ができる							
車椅子の処方と適合判定ができる							
座位保持装置の処方と適合判定ができる							
h. 訓練・福祉機器							
①自助具			○		A		
自助具の紹介、家族指導ができる							
②環境制御装置			○		A		
環境制御装置を処方できる							
i. 摂食嚥下訓練		○			A		
間接的嚥下訓練と直接的嚥下訓練を処方できる							
経管栄養法を実施できる							
j. 排尿・排便管理							
①排尿管理		○			B		
間歇的導尿法(方法)を患者に指導できる							

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年	3年	4年	5年			
間歇的導尿の管理(時間設定, 飲水管理)ができる							
収尿器の紹介ができる							
膀胱瘻の管理・処置ができる							
②排便管理		○			B		
緩下剤・坐薬・浣腸の処方・管 理, 食事・生活指導ができる							
③尿路合併症の治療		○			B		
合併症(尿路感染, 結石, 膀胱尿 管逆流)の治療, 泌尿器科へのコ ンサルテーションができる							
k. ブロック療法							
①神経・筋ブロック			○		A		
主要な神経の神経ブロックが 実施できる							
主要な筋の筋内神経ブロック が実施できる							
②トリガーポイントブロック			○		A		
腰痛のトリガーポイントに対 して注射ができる							
項部痛のトリガーポイントに 対して注射ができる							
l. 心理療法							
①認知障害に対するもの				○	A		
神経心理学的アプローチがで きる							
②心理的サポート				○	A		
患者の心理状態を概ね把握 し, 初歩的なカウンセリング ができる							
m. 薬物療法							
①痙縮に対する処方		○			A		
痙縮に対し, 筋弛緩薬の処方 ができる							
②排尿排便障害に対する処方		○			B		
病態に応じた薬物療法が行える							
③疼痛に対する処方		○			A		
局所の疼痛を評価し, 鎮痛薬 の処方ができる							
④症候性てんかんに対する処方		○			A		
脳損傷等による症候性てんか ん患者に対し, 抗てんかん薬 の処方ができる							
痙攣発作時に治療ができる							
⑤精神症状(うつ状態, 不穏な ど)に対する処方		○			B		
うつ状態の患者に抗うつ薬の 処方ができる							
脳損傷患者のせん妄や痴呆・ 攻撃的行為に対し, 薬物治療 ができる							

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年	3年	4年	5年			
⑥異所性骨化に対する処方 異所性骨化の薬物療法ができる		○			A		
⑦その他			○	○	A		
IV. マネージメント・法制度							
a. チームアプローチ							
①チーム医療の管理		○			A		
リハビリチームの構成とスタッフの役割を理解し、医師の役割を果たせる							
b. 地域連携		○			B		
地域における社会資源を把握している							
地域のスタッフと交流できる							
c. 医療制度の概略を理解している		○			B		

(各論)

2. リハビリテーション医学各論	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年次	3年次	4年次	5年次			
(1)脳卒中							
I. 知識							
脳卒中の分類を理解している	○	○			A		
損傷部位による障害の違いを理解している	○	○			A		
急性期における血压管理の意義を理解している	○	○			A		
麻痺の回復過程を理解している		○			A		
II. 診断・評価							
損傷部位ならびに程度を診断できる	○	○			A		
評価尺度を用いて中枢性運動障害を評価できる		○			A		
高次脳機能障害を評価できる		○	○		A		
摂食・嚥下障害を評価できる		○			A		
排尿障害を評価できる		○	○		A		
III. 治療							
a. 原疾患と併存症に対応できる							
再発予防(薬物療法)		○			A		
痙攣発作	○	○			A		
水頭症	○	○			A		
b. 特徴的な障害と合併症の管理ができる							
摂食・嚥下障害		○			A		
排泄障害		○	○		A		
肩手症候群		○			A		
肩関節亜脱臼		○			A		
疼痛		○			A		
痙縮		○			A		
c. 理学療法の処方ができる		○			A		
d. 作業療法の処方ができる		○			A		
e. 言語療法の処方ができる		○			A		
f. 補装具の処方ができる		○			A		
(2)外傷性脳損傷							
I. 知識							
外傷性脳損傷の分類を理解している	○	○			A		
損傷部位による障害の違いを理解している	○	○			A		
II. 診断・評価							
損傷部位ならびに程度を診断できる	○	○			A		
評価尺度を用いて、中枢性運動障害を評価できる		○			A		
高次脳機能障害を評価できる		○			A		
III. 治療							
a. 原疾患と併存症に対応できる							

	到達年次				到達レベル	自己評価	指導責任者評価
	1-2年次	3年次	4年次	5年次			
痙攣発作	○	○			A		
b. 特徴的な障害と合併症の管理ができる							
摂食・嚥下障害		○			A		
排泄障害		○			A		
痙縮		○			A		
c. 理学療法の処方ができる		○			A		
d. 作業療法の処方ができる		○			A		
e. 言語療法の処方ができる		○			A		
f. 補装具の処方ができる		○			A		
g. 神経心理学的アプローチができる							
機能障害に対するアプローチ			○		A		
外的補助手段・包括的アプローチ			○		A		
h. 就学・就業支援ができる				○	C		
(3) 脊髄損傷							
I. 知識							
a. 脊髄損傷の分類を理解している							
外傷性脊髄損傷	○	○			A		
その他の脊髄損傷	○	○			A		
b. 脊髄損傷の病態を理解している							
損傷レベルと機能予後	○	○			A		
損傷部位と病型	○	○			A		
c. 脊髄損傷の合併症を理解している	○	○			A		
II. 診断・評価							
a. 損傷レベルと病型を診断できる	○	○			A		
b. 評価尺度を用いて機能障害を評価できる							
ASIA		○			A		
Zancolli 分類		○			A		
Frankel 分類		○			A		
c. 排尿障害を評価できる		○	○		A		
d. 呼吸障害を評価できる	○				A		
III. 治療							
a. 原疾患と併存症に対応できる		○			A		
b. 特徴的な障害と合併症を管理できる							
自律神経過反射		○			A		
異所性骨化		○			A		
排泄障害		○	○		A		
褥瘡		○			A		
疼痛		○			A		
痙縮		○			A		
呼吸障害		○			A		
c. 理学療法の処方ができる		○			A		
d. 作業療法の処方ができる		○			A		
e. 補装具の処方ができる		○			A		

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年次	3年次	4年次	5年次			
f. 心理学的アプローチができる		○			A		
(4)二分脊椎							
I. 知識							
二分脊椎の分類を理解している		○	○	○	C		
II. 診断・評価							
麻痺レベルと歩行を評価できる		○	○	○	C		
排尿障害を評価できる		○	○	○	C		
脊柱・下肢変形を評価できる		○	○	○	C		
水頭症を診断できる		○	○	○	C		
III. 治療							
a. 原疾患と併存症に対応できる		○	○	○	C		
b. 特徴的な障害と合併症の管理 ができる							
排泄障害		○	○	○	C		
水頭症		○	○	○	C		
脊柱・下肢変形		○	○	○	C		
c. 理学療法の処方ができる		○	○	○	C		
d. 作業療法の処方ができる		○	○	○	C		
e. 補装具の処方ができる		○	○	○	C		
f. 手術療法の適応が判断できる		○	○	○	C		
g. 就学支援ができる				○	C		
(5)関節リウマチ							
I. 知識							
症状の発現機序を理解している	○	○			A		
病型分類を理解している	○	○			A		
関節変形の名称と特徴を理解 している	○	○			A		
II. 診断・評価							
診断基準に沿って診断できる (ARA)	○	○			A		
機能障害 ADL を評価できる (Steinbrocker class 分類)		○			A		
進行度(病期)を評価できる (Steinbrocker stage 分類)		○			A		
III. 治療							
a. 原疾患と併存症に対応できる							
局所及び全身の安静を指導で きる		○	○	○	A		
薬物療法を理解している		○	○	○	A		
b. 理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
c. 作業療法の処方ができる		○	○	○	A		
d. 補装具の処方ができる		○	○	○	A		
e. 手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A		
f. 生活指導ができる		○	○	○	A		
(6)骨関節疾患							
①肩関節周囲炎・腱板断裂							

	到達年次				到達レベル	自己評価	指導責任者評価
	1-2年次	3年次	4年次	5年次			
症状を評価できる	○	○			A		
X線学的所見を評価できる	○	○			A		
薬物療法が行える		○	○	○	A		
関節内注射が行える		○	○	○	A		
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A		
生活指導ができる		○	○	○	A		
②腰痛・脊椎疾患							
症状を評価できる	○	○			A		
X線学的所見を評価できる	○	○			A		
薬物療法が行える		○	○	○	A		
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
補装具の処方ができる		○	○	○	A		
手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A		
生活指導ができる		○	○	○	A		
③変形性股関節症							
症状を評価できる	○	○			A		
X線学的所見を評価できる	○	○			A		
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
補装具の処方ができる		○	○	○	A		
手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A		
生活指導ができる		○	○	○	A		
④変形性膝関節症							
症状を評価できる	○	○			A		
X線学的所見を評価できる	○	○			A		
関節穿刺、関節内注射が行える		○	○	○	A		
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
補装具の処方ができる		○	○	○	A		
手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A		
生活指導ができる		○	○	○	A		
⑤骨折・骨粗鬆症							
代表的な骨折(大腿骨頸部骨折・脊椎圧迫骨折など)を理解している	○	○			A		
症状を評価できる	○	○			A		
X線学的所見を評価できる		○	○	○	A		
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
補装具の処方ができる		○	○	○	A		
手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A		
生活指導ができる		○	○	○	A		
(7)脳性麻痺							
I. 知識							
脳性麻痺の定義を理解している	○	○			A		
病型分類を理解している	○	○			A		
成人脳性麻痺の問題点(二次障害)を理解している		○	○	○	A		

	到達年次				到達レベル	自己評価	指導責任者評価
	1-2年次	3年次	4年次	5年次			
II. 診断・評価							
発達を評価できる		○	○	○	A		
原始反射が評価できる		○	○	○	A		
評価尺度を用いて中枢性運動障害を評価できる		○	○	○	A		
III. 治療							
a. 原疾患と併存症に対応できる		○	○	○	A		
b. 特徴的な障害と合併症の管理ができる							
痙攣		○	○	○	A		
痙縮		○	○	○	A		
呼吸障害		○	○	○	A		
c. 理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
d. 作業療法の処方ができる		○	○	○	A		
e. 補装具の処方ができる		○	○	○	A		
f. 手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A		
g. 就学支援ができる		○	○	○	A		
(8)神経筋疾患							
①パーキンソン病							
I. 知識							
パーキンソン病の症状を理解している	○	○			A		
薬物療法を理解している		○	○	○	A		
II. 診断・評価							
評価尺度を用いて中枢性運動障害を評価できる		○			A		
障害度を評価できる (Hoehn & Yahr 重症度分類)		○			A		
III. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
作業療法の処方ができる		○	○	○	A		
言語療法の処方ができる		○	○	○	A		
②脊髄小脳変性症							
I. 知識							
病型分類を理解している	○	○			A		
II. 診断・評価							
診断基準にそって診断できる	○	○			A		
評価尺度を用いて中枢性運動障害の評価ができる		○			A		
III. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
作業療法の処方ができる		○	○	○	A		
言語療法の処方ができる		○	○	○	A		
③多発性硬化症							
I. 知識							
疾患の概要を理解している	○	○			A		
薬物療法を理解している	○	○			B		

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年次	3年次	4年次	5年次			
II. 診断・評価							
評価尺度を用いて中枢性運動障害の評価ができる		○			A		
III. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
作業療法の処方ができる		○	○	○	A		
生活指導ができる		○	○	○	A		
④筋萎縮性側索硬化症							
I. 知識							
疾患の概要を理解している	○	○			A		
人工呼吸器の適応を理解している	○	○			A		
II. 診断・評価							
症状を評価できる	○	○			A		
筋電図による診断ができる			○		A		
呼吸障害を評価できる	○	○			A		
摂食・嚥下障害を評価できる		○			A		
III. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
作業療法の処方ができる		○	○	○	A		
言語療法の処方ができる		○	○	○	A		
補装具の処方ができる		○	○	○	A		
人工呼吸器の管理ができる		○	○	○	B		
心理的サポートができる		○	○	○	A		
⑤多発性神経炎							
I. 知識							
疾患の概要を理解している	○	○			A		
薬物療法を理解している	○	○			A		
II. 診断・評価							
症状を評価できる	○	○			A		
筋電図による診断ができる			○		A		
III. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
作業療法の処方ができる		○	○	○	A		
補装具の処方ができる		○	○	○	A		
⑥ポストポリオ症候群							
I. 知識							
疾患の概要を理解している		○			A		
II. 診断・評価							
症状を評価できる		○			A		
筋電図による診断ができる			○		A		
III. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
作業療法の処方ができる		○	○	○	A		
補装具の処方ができる		○	○	○	A		
生活指導ができる		○	○	○	A		

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年次	3年次	4年次	5年次			
⑦末梢神経損傷							
I. 知識							
末梢神経損傷の分類を理解している		○			A		
末梢神経の再生過程を理解している		○			A		
II. 診断・評価							
症状を評価できる	○	○			A		
筋電図による診断ができる			○		A		
III. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
作業療法の処方ができる		○	○	○	A		
補装具の処方ができる		○	○	○	A		
⑧筋ジストロフィー							
I. 知識							
疾患の概要を理解している	○	○			A		
II. 診断・評価							
上肢機能障害を分類できる		○	○	○	A		
機能障害度を評価できる(厚生労働省分類)		○	○	○	A		
筋電図による診断ができる			○		A		
筋生検による診断ができる		○	○	○	C		
呼吸障害を評価できる	○	○			A		
摂食・嚥下障害を評価できる		○			A		
III. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
作業療法の処方ができる		○	○	○	A		
言語療法の処方ができる		○	○	○	A		
補装具の処方ができる		○	○	○	A		
就学支援ができる		○	○	○	C		
(9)切断							
I. 知識							
切断部位による機能的特徴を理解している		○	○	○	A		
II. 診断・評価							
断端の状態(形状、断端長)を評価できる		○	○	○	A		
合併症を評価できる		○	○	○	A		
III. 治療							
断端管理ができる		○	○	○	A		
義肢の処方ができる		○	○	○	A		
義肢の適合判定ができる		○	○	○	A		
合併症に対応できる		○	○	○	A		
(10)慢性閉塞性肺疾患							
I. 知識							
疾患の概要を理解している	○	○			A		
II. 診断・評価							

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年次	3年次	4年次	5年次			
呼吸障害を評価できる	○	○			A		
Ⅲ. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	A		
生活指導ができる		○	○	○	A		
(11)循環器疾患							
①心筋梗塞							
Ⅰ. 知識							
疾患の概要を理解している	○	○			A		
Ⅱ. 診断・評価							
心電図を評価できる	○	○			A		
Ⅲ. 治療							
ガイドライン(厚生労働省)にそ って急性期の運動処方ができる		○	○	○	A		
運動負荷試験を実施できる		○	○	○	A		
慢性期の運動処方ができる		○	○	○	A		
生活指導ができる		○	○	○	A		
②慢性心不全							
Ⅰ. 知識							
疾患の概要を理解している	○	○			A		
Ⅱ. 診断・評価							
NYHA 機能分類によって評価で きる	○	○			A		
Ⅲ. 治療							
重症度によって運動処方ので きる		○	○	○	B		
③末梢循環障害							
Ⅰ. 知識							
疾患の概要を理解している	○	○			A		
Ⅱ. 診断・評価							
末梢循環障害を診断できる		○	○	○	B		
Ⅲ. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	B		
(12)その他							
①悪性腫瘍							
Ⅰ. 知識							
疾患の概要を理解している	○	○			A		
Ⅱ. 診断・評価							
疾患の状態把握が行える		○	○	○	B		
Ⅲ. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	B		
作業療法の処方ができる		○	○	○	B		
疼痛の管理ができる		○	○	○	B		
心理的アプローチができる		○	○	○	B		
②熱傷							
Ⅰ. 知識							

	到達年次				到達 レベル	自己評価	指導責任 者評価
	1-2年次	3年次	4年次	5年次			
疾患の概要を理解している	○	○			A		
II. 診断・評価							
機能障害を評価できる		○	○	○	B		
異所性骨化を診断できる		○	○	○	B		
III. 治療							
理学療法の処方ができる		○	○	○	B		
作業療法の処方ができる		○	○	○	B		
補装具の処方ができる		○	○	○	B		

リハビリテーション科専門医 研修手帳

第1版 第2刷 2006年6月より引用